

環境と共生

高橋弘次

地球上の環境問題としては、オゾン層の破壊・地球の温暖化・酸性雨・熱帯林の減少・砂漠化・開発途上国の公害・野生生物種の減少・海洋汚染・有害廃棄物の越境移動などの問題が指摘されている。こうした環境問題に立ち向かう人間生活のあり方として、共生（ともいき）が提唱されている。この共生の思想の起源を探るとともに、共生という人間生活のあり方を、私の理解の範囲内で述べてみたいと思う。

共生の思想とは、仏教の根本思想「縁起」pratiya-samutpadaから生まれているという指摘がある。しかし直接的には中国の善導（六一三―六八二）という初唐の浄土教思想家の「願共諸衆生往生安樂国―願わくは諸の衆生と共に安樂国に往生せん」（『往生礼讃』）という偈文、いま一つは源信（九四二―一〇一七）が『往生要集』に「共生極樂成仏道―共に極樂に生じて仏道

を成ぜん」（四弘誓願）ということばを、法然（一一三三―一二二二）が受けとめ、わが国に根づかせたといえよう。

共生（きょうせい）と発音するのは漢音であり、仏教読みは共生（ぐしやう）である。サンスクリットにそのことばを求めるならば、共生 samyukta（共・共生・和合・相応）が指摘できる。いずれのことばも「理想とする国・世界に人びとと共に往こう」というほどのことばである。ひとりではなく他の人びとと共に、というところにアクセントがある。その共生する国・世界を安樂国・極樂浄土とするが、ここでは理想とする国・安全な世界とみなしておきたい。この理想とする世界に自分のみが往く（自利）のではなく、人びとと共に往く（利他）ことを強調しているのである。

これを現代において浄土宗の信仰運動として、「共生会」と呼

称して、その運動を提唱したのが椎尾弁匠（一八七六一一九七二）である。彼は『共生の基調』のなかでつぎのように述べている。

共に生きるということは、唯一の生きるということを全うするのだということ明らかに体験せらるるのであります。その道は決して日本だけの道とは思いません。それは同時に人類が同じに進む道であって、どこにもそうあるべき道である。ただ今まで非常に誤った道を歩いていったから、正しい道に入ることができなかったが、日本が正しい人類の共生の道を体験することができずれば、中国でもアメリカでも、ロシアでも、いずれでも人類共生の大きな国家生命を味い、社会生命を味わってこれを現わしてゆく。そうになりました時に始めて世界の人類の共生の生命を明らかにすることができず⁽³⁾。

この共生思想をまなび、これを援用して建築家の黒川紀章は『共生の思想』を著述して、独自の共生思想を提唱している。この共生ということばの概念は、今日の社会のあらゆる面、とくに地球上の環境問題に対応する人間生活のあり方として受けとめられているといつてよい。人間そのものが互いに生命を大切にしようとする立場から、自然観・環境観をみなおす・考え直す動きのなかに取り入れられようとしている。

この共生思想の思想的淵源とみなされる縁起とは、

pratiya-samutpada (skt) という「縁りて起ること」「縁りて生

起すること」を意味している。つまりこれは因と縁——直接的原因を因 (heiu) といい、間接的原因 (条件) を縁 (Pratiya) といい、この因縁が和合して、すべての現象世界は生起しているといふのである。いわゆる、すべての現象世界は、因縁によって生起している、というのが縁起の意味するところである。

この縁起は初期仏教の時代から種々の縁起説（五蘊説・十二縁起説・十二処十八界説など）が生まれ表現されている。そこで、この縁起の世界（現象）に向けて、仏教を実践するものが、いかに立ち向かうかを説き示している経典・玄奘訳の『般若心経』を紹介したい。

般若波羅蜜多心経

唐三藏法師玄奘訳

観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不増不減。是故空中。無色。無受相行識。無限耳鼻舌身意。無色声香味触法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明尽。乃至無老死。亦無老死尽。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。

三世諸仏。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。故知

般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。能除一切苦。真實不虛故。說般若波羅蜜多呪。

即說呪曰

揭帝 揭帝 波羅揭帝 波羅揭帝 菩提僧訶
揭帝 揭帝 波羅揭帝 波羅揭帝 菩提僧訶

般若波羅蜜多心經

唐の三藏法師玄奘訳す

觀自在菩薩、深般若波羅蜜多を行じし時、五蘊皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したまへり。舍利子よ、色は空に異ならず。空は色に異ならず。色はすなわちこれ空、空はすなわちこれ色なり。受想行識もまたまたかくのごとし。舍利子よ、

この諸法は空相にして、生せず、滅せず、垢つかず、淨からず、増さず、減らず、この故に、空の中には、色もなく、受も想も行も識もなく、眼も耳も鼻も舌も身も意もなく、色も声も香も味も触も法もなし。眼界もなく、乃至、意識界もなし。無明もなく、また、無明の尽くることもなし。乃至、老も死もなく、また、老と死の尽くることもなし。苦も集も滅も道もなく、智もなく、また、得もなし。得る所なきを以ての故に。瞿提薩埵は、般若波羅蜜多に依るが故に。心に罣礙なし。罣礙なきが故に、恐怖あることなく、(一切の)顛倒

夢想を遠離して涅槃を究竟す。

三世諸仏も般若波羅蜜多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。故に知るべし、般若波羅蜜多はこれ大神呪なり。これ大明呪なり。これ無上呪なり。これ無等等呪なり。よく一切の苦を除き、真實にして虚ならざるが故に。般若波羅蜜多の呪を説く。すなわち呪を説いて曰わく、

揭帝 揭帝 波羅揭帝 波羅揭帝 菩提僧訶
揭帝 揭帝 波羅揭帝 波羅揭帝 菩提僧訶

この『般若心經』のはじめには、

觀自在菩薩、深般若波羅蜜多を行じし時、五蘊皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したまへり。

とある。これが『般若心經』の総論である。あとにつづく内容は心經の各論である。

仏教実践の代表者とみなされる觀音菩薩が、智慧の行を行じた時 (caryāṃ carāṇāṃ)、五蘊 (色・受・想・行・識)、つまり人間存在 (五取蘊) は空 (sunyata) なりと照見 (paśyati sma・見抜いた) して、一切の苦厄 (苦境) から救われた、というのである。ここでいう五蘊 (色・受・想・行・識) は、直接的には「凡夫としての有情の生存」をいうが、「五蘊は一切法である」ともいえるのである。つまり五蘊は人間存在をい

うとともに一切の現象すべてを指しているといえるのである。

この五蘊を照見（見抜く）して空じていくというのである。⁽⁸⁾空（*śūnyata*）じていくというのは、換言すれば、欲望・執着・愛取を抑制し滅滅していくことになる。したがってこの欲望・執着を抑制し滅滅していくならば、人間は一切の苦境（苦しみ）から救われる（脱出・解放）というのである。

この五蘊という人間を中心とする現象世界は、人間の欲望の充足のために生じた世界であり、環境問題もその現象世界の一面である。その現象世界（環境問題）に対する対処、つまり智慧の行を行じて照見し、空じていく（*śūnyata*）という対処のあり方は、仏教の現象世界（環境問題）に対するあり方とみてよい。それは欲望の抑制・滅滅を意味しているとみなされるからである。

この仏教の実践のあり方に対して、『般若心経』の終わりには、『gate gate pāragate pārasaṃgate — 往きましよう、往きましよう、彼の岸に往きましよう、彼の岸に一緒に往きましよう — 拙訳』とあり、これは観自在菩薩の呼び声⁽⁹⁾なのである。鈴木大拙は、ここをを観自在菩薩の「内的存在の深奥よりする絶叫である」と述べている。また、「この絶叫と共にすべてのものが明らかになった、観自在菩薩の行はその成果を得たのである」ともいつている。

「gate gate pārasaṃgate 往きましよう、往きましよう

……彼の岸に一緒に往きましよう」という呼び声は、まさしく共生 *pārasaṃgate* 一緒に往きましよう、を強調しているものと受けとめることができる。

科学の発展による人間生活の合理性の追求は、仏教の一面からみると、欲望の充足とみなされる。現代社会における欲望の充足に制限を求めようとして、「環境と共生」というテーマが出されていると、仏教の立場から理解されるのである。つまりこの欲望の充足に抑制・滅滅を加えることが、自を利し、他を利するといふ、仏教徒の実践のあり方・自利他利の世界を現成させることになるのである。このように『般若心経』のはじめの「五蘊皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したまえり」という総論と、終わりのことば（神呪・真言）から、かかる仏教徒の環境問題に対するあり方が見出されるのである。

いま一つ、釈尊の最後の説法とみなされている『遺教経』（『仏垂般涅槃略説教誡経』）に、少欲・知足が強調されていることも考え併せてみるべきではないかと思う。『遺教経』につきのように説かれている。

汝等比丘、当に知るべし。多欲の人は利を求むること多きが故に苦悩も亦多し。少欲の人は求むること無く、欲すること無ければ則ち此の患無し。直爾に少欲のみなりとも尚修習すべし。何に況んや少欲の能く諸善功德を生ずるをや。少欲

の人は則ち諛曲して、以て人の意を求むること無し。亦復た諸根の牽く所と為らず。少欲を行すれば心則ち坦然として憂畏する所無し。事に触れて余あり。常に足らざることを無し。少欲有らば則ち涅槃あり。是れを少欲と名く。

汝等比丘、若し諸の苦惱を脱せむと欲すれば、当に知足を觀すべし。知足の法は即ち是れ富婁安隱の処なり。知足の人は地上に臥すと雖も猶安樂なりとす。不知足の者は天堂に処ると雖も亦意に稱はず。不知足の者は富めりと雖も而も貧し。知足の人は貧しと雖も而も富めり。不知足の者は常に五欲の爲に牽かる。知足の者の憐愍する所爲り。是を知足と名く。⁽¹⁾

「多欲の人は利を求むること多きが故に苦惱も亦多し。少欲の人は求むること無く、欲すること無ければ則ち此の患無し。……少欲有らば則ち涅槃あり。是れを少欲と名く」とある。また「若し諸の苦惱を脱せむと欲すれば、当に知足を觀すべし。知足の法は即ち是れ富婁安隱の処なり。……不知足の者は常に五欲の爲に牽かる。知足の者の憐愍する所爲り。是を知足と名く。」とある。この少欲（欲が少なくて満足する）知足（足ることを知る）は共生のあり方と考えられ、環境問題に対応する、仏教徒の人間生活のあり様として受けとめることができよう。

(1) 『地球時代の新しい環境観と社会像』内藤正明編著、六一七頁。
「ここには地球環境問題に関して、『問題の概要』『問題の現状』」

が困とのかかわり」「いままでのおもな取り組み」「いままでの取り組みでの問題点」が指摘されていることを紹介しておく。

(2) 『梵和大辞典』一三六七頁。samyuktā には「共・勤・相応・共生・和合」などの漢訳があてられている。「Sanskrit-English-Dictionary」(monier) p.1112 には 'conjoined, together, combined' などと英訳されている。samyuktā は sam- 複数の接頭語に yuj (結合) の過去受動分詞である。

(3) 『椎尾辨匠選集』第九卷、五八八頁。さらに「共生講壇」同書七頁には「協同共生」として以下のような論述がある。

「仏教は無我の根底に立ち縁起の実相を主張いたします。すべてに個の孤立を認めませぬ。一切は縁によってできあがってゆくのであります。誰人といえども一個人として独存すべきものではありません。この肉体が衆縁の合成であるように、その存続もまた衆縁の力であります。縁に遠近の差別こそあれ、全法界をあげて、一切が相依相関でないものではありません。すべては協同であり共生であり、社会のおかげであります。各人はことごとく社会の一員として、完全に立たねばなりません。どんな山奥の一軒家でも、全然社会と没交渉であり得るものではなく、世間の風波もくれば経済上の影響も見舞ってまいります。かくいえばとていつらに烏合でありおつきあいではなりません。その共同に縛られず囚われず真の社会人として生きることが私たちの真生正命であり真実生活でありま

す。」

(4) 舟橋一哉著『原始佛教思想の研究』六一―六九頁。

(5) 『般若心経・金剛般若経』岩波文庫、九一―一四頁。この『般若心経』には羅什訳をはじめ七種類もあるが、日本人（中国・韓国）にいちばんよく親しまれている玄奘訳を用いた。なお『般若心経』については（岩波文庫本）の一七〇頁からの解題を参照された。

(6) 『般若心経』梵本・空外漢訳・和訳は、山本空外(昭和六十年)の出されたものであるが、彼は早くから「行を行じし時」と訳していた。

(7) 舟橋一哉著『原始佛教思想の研究』「五蘊説」の説明(二二—七頁)を参照されたい。

(8) 『空(Sūnyatā)なりと照見(paśyati sma)する』というのは、無明・執着・欲望から解放される、という意味を表わしている、とみなされる。観自在菩薩の実践は、六波羅蜜(布施 dāna・持戒 śīla・忍辱 kṣānti・精進 vīrya・禪定 dhyāna・智慧 prajñā)であるが、「深般若波羅蜜多を行じし時」の梵文は prajñā-pāramitāyān caryān caramāṇo (智慧の完成において、行を行じつゝあったそのときに)とあるように、智慧の完成、無明・欲望からの解放であることは容易に理解できよう。

(9) 『鈴木大拙全集』第五卷の二一—八頁。とくに「般若経の哲学と宗教」を参照されたい。

(10) 『鈴木大拙全集』一一五—一二二頁。

(11) 『国訳一切経』經集部三—一四四頁。『遺教経』のこの部分には以下の註があるので転載する。

【四三】論曲。へつらひて殊更に心を曲げ従ふこと。

【四四】欺誑。あざむきたぶらかすこと。

【四五】以下教節、正宗分中の第二で、成就出世間大人功德分と名けらるゝ一段である。蓋し上に述べた諸徳は、何れも世間的徳目であつて、必ずしも出世間的、宗教的徳行ではないが、これに反し以下所述の諸徳は何れも大人即ち菩薩の修すべき出世間的徳行なるが故にかく名けたものであらうといはれる。而して以下所述の、少欲・知足・遠離・精進・不記念・禪定・智慧・不戲論の八は八大人覺とよばれてゐる。

【四六】坦然。平安な貌。

【四七】無為(asaṃskṛtam)。作為することのないことをいひ、所謂はからひを離れた所をいふ。

(12) 涅槃とは niḥśreyasa の首字、煩惱の炎を吹き消した状態を意味する。肉体のある場合は有余涅槃といい、肉体を滅したときは無余涅槃という。

(13) 五欲とは五つの欲望——眼・耳・鼻・舌・身(五根)の五境に対する欲望のこと。色欲・声欲・香欲・味欲・触欲である。

(たかはし・こうじ、浄土教思想、佛教大学教授)